東亜臨床心理学研究　VOL.20　2021（Pp. 1～2）

巻　頭　言

新型コロナウィルスと臨床心理学専攻のこれから

桑　野　浩　明

2019年11月、中国、武漢での感染拡大に端を発し、新型コロナウィルスは、世界で猛威を振るい、そして現在も尚、私達の生活に大きな影響を与え続けている。

人と会い、食事をし、遠くへ移動するということが、大幅に制限され、「ソーシャルディスタンス」、「三密回避」、「ステイホーム」など、通常であれば、1年を代表する言葉として位置付けられそうな、様々な新しい言葉が、世の中に溢れかえった。世界は一変し、また変わり続けている。

東亜大学大学院臨床心理学専攻においても、この未曽有の疫病への対応を中心に1年が終わったと言っても過言ではない。ZOOMや課題を用いた遠隔授業、臨床心理センターの感染防止対策、現場での実習が行えなくなった病院や児童養護施設、学校の実習への対応などである。

そして、本号が「東亜大学大学院臨床心理学専攻紀要」として、第20号の節目の号となる。20年間の研究や臨床に関する知見や想いを、この紀要は表現し、発信してきた。

私は、本大学院臨床心理学専攻の第3期生である。村山正治先生のゼミに所属し、馬場禮子先生に精神分析学とロールシャッハテスト、上里一郎先生に行動療法、金田鈴江先生には、精神医学を、中田行重先生には、初めてのセンターの事例のスーパーバイズをして頂き、様々な貴重なお言葉を頂いた。下川昭夫先生には、気さくに臨床心理学の疑問について教えて頂き、瀬戸先生には、統計や大学院生活全般について、細やかに相談させて頂いた。4年間在籍させて頂いたが、臨床心理学という学問に触れることが楽しくて仕方ない時間だった。このような時間を作って頂いた、村山先生をはじめ、諸先生方には、感謝をしてもしきれない思いである。

2017年に公認心理師法が成立し、心理職は悲願の国家資格となった。2018年度からは、大きくカリキュラムが変わり、これまでの養成とは異なる実習の急増など、対応に右往左往していたところに、今回の新型コロナウィルスのパンデミックである。まさにダブルパンチと言ったところだろうか。

新型コロナウィルスによる変化では、当たり前のことが当たり前でなくなった。飲食店での会食や宴会などの交流、人が多く集まるイベントなど、残念に感じた人も多いはずだ。一方で、「どうしてあのようにやっていたのだろう」とか、「却って静かになってよかった」とか、「シンプルになりすっきりした」など、慣習や前例の踏襲ということで、行っていたことも見直され、どこか新しい感覚を味わったことも多いように思う。

「エッセンシャルワーカー」という言葉も、今回のコロナ禍で注目を集めた言葉の一つだ。人間の生活にとって、本当に必要不可欠なものは何か、私は考えさせられたし、社会全体でも、そのような問題が突き付けられたように思う。

「果たして、心理カウンセラーは社会にとってエッセンシャルか」。ウィルスに冒された人にとって必要なのは、水分、食料、体が冷えず休める環境、医師、看護師、薬、そして看病をしてくれる家族や隣人・知人が思い浮かぶ。「心理カウンセラーはどのような時エッセンシャルになるのか」、「そして、どのような人がエッセンシャルなカウンセラーなのか」。

社会にとって、資格の存在が重要なのは言うまでもないが、心のケアがエッセンシャルになる時は、その資格を超え、「その人だから」が、クライエントのエッセンシャルであろう。それは何も、カウンセラーに限らないが、社会にとって、人間にとって生き残るために何が必要なのかが、問われているように思えてならない。

ポストコロナの新しい時代に、私が経験したような、「臨床心理学が面白い」という空気を、先人の先生方のように、専攻に流していくのは容易なことではないだろう。私が院生の時に感じた「面白い」とは、理性ではなく、身体で感じた感覚である。そして、私にとっては、身体で感じた、「面白い」と思う学問を学ぶことが、その時の自分にとって、心から欲していたことなのだろうと思う。

これから入学してくる大学院生は、何を求めてくるのだろうか。将来に向けての大きな投資を、出来る限り実りあるものにすべく、私も自己研さんに励み、院生の方から大いに学び、共によりよい時間を作っていきたいと思う。

新型コロナウィルスの終息が見通せない今、ポストコロナを語ることは難しいが、この未曽有の危機の中、私たちは、何を求めるのか、自己を探求し、学び、訓練を受け、経験を積んだ心理療法家は、必ず社会の中に役に立つ場所があるのではないか。

新しい時代の中で、これまで 20 年間の専攻の努力と英知を引き継ぎ、少しでも面白く感じる、臨床心理学を専攻全体で追及していけたらと思う。